

# 長江と黄河

## —中国初期農耕文化の比較研究—

甲 元 真 之

### はじめに

1. 新石器時代遺跡出土の自然遺物
2. 新石器時代の栽培穀物
3. 新石器時代の採集植物

4. 新石器時代の家畜動物
5. 新石器時代の狩猟動物
6. 新石器時代の魚類
7. 討 論

### 論文要旨

新石器時代の自然遺物が検出されている陝西省以東の中国の遺跡につき、地域や時期によって、食料対象がどのように変遷していったかを考察する。自然遺物については簡単な報告しかなされていないものは、取り扱わなかつたが、検討の対象とした392遺跡の数は、中国新石器時代の全体像を十分に反映していることができる。

長江流域の新石器時代初期の段階（河姆渡文化、馬家浜文化）では、稻作を行い、ブタやイヌ、スイギュウなどの飼育がなされているが、食料対象である自然遺物の広がりは広範囲に及び、特定の食料に大きく依存することのない、網羅的な食料体系をもっていた。大溪文化、崧沢文化段階になると家畜の比重が低下し、哺乳動物ではむしろシカ科の狩猟に依存する度合いが高まる傾向にあるが、実際には動物性タンパク質の多くは魚類に求められたと想定され、稻作を中心とした水辺での生業活動が主体であった。新石器時代の後半期の良渚文化段階にはいると、栽培穀物はコメ、狩猟はニホンジカそして河川漁撈に依拠する選別的な経済類型にまで発展していった。

黄河流域においても、初期の段階（裴李崗文化、磁山文化段階）では、食料対象は広範囲に及ぶ網羅的な食料体系が見られるが、仰韶文化期ではアワを中心とするもの、キビやコウリヤンを栽培し、一部では長江流域の影響をうけてイネの栽培もなされる。ブタやイヌの飼育も持続的にみられ、多種にわたるシカ科の狩猟が行われて、特定の食料品目に収斂することはない。龍山文化段階になると、栽培穀物にムギが、家畜動物にもヒツジ、ウシが加わって、食料資源の多様化が指摘されるようになる。狩猟動物もシカ科が対象として重要視されるが、キバノロ、シフゾウ、ニホンジカなどと、種が特定されることはない。このように食料の範囲は狭まるが、主として依存する食料対象は多角的な生業類型を示す。

食料獲得のための経済効果としては、家畜飼育はマイナスであり、エネルギーの損失は人間に比べて最も少ないブタで2倍、最も多いウシでは20倍近くに達する。このことから長江流域における家畜飼育の低下は、稻作栽培を中心とした選別的な生業活動が、施肥以前の農業生産においては如何に有効であったかを示している。畑作物の栽培が淮河を南下しないのに、稻作栽培が黄河流域にも及び、さらに朝鮮、日本と原産地を越えて広範囲に展開して、その地域での重要な食料源となったことは、それを如実に物語っている。

ナットに比べて穀物のもつ優位性は、タンパク質を豊富に内蔵していることである。しかしこのタンパク質は体内においてはナトリウム分がなければ分解吸収されない。このために稻作栽培を中心とした選別的な経済類型においても、狩猟と一部の家畜飼育に依存する食料体系が続くのであり、塩の生産と供給をまつてはじめて、本格的な稻作栽培文化が形成される運びとなる。